

Punch 中のアイルランド (人)

——ジョン・テニエルの諷刺画——

内 海 智 仁

(2008 年 6 月 30 日受理)

The Irish / Ireland in *Punch*: Cartoons by John Tenniel

Tomohito UTSUMI

18 世紀後半から、James Macpherson (1736-1796) の *Ossian* 詩やケルト遺跡の発掘などにより、ヨーロッパ中を「ケルト・ブーム」が席捲する。幻視的・神秘的であり、知性的というよりは感性的な、潤いのある古きよきもうひとつのヨーロッパへの憧憬。

Comerford によれば、19 世紀はじめには、アイルランドの (というより詩語でいう「エリン(“Erin”)」の) 代表的な「象徴・表象」(“emblems”) が出揃うことになる。「ハーブ」、「シャムロック」、「ケルト十字」、「ラウンド・タワー」、「獵犬」などである：

By 1800, or shortly thereafter, a set of stock emblems of Ireland (in such contexts now increasingly referred to as “Erin”) was in place. There was the harp, the shamrock, the Celtic cross and the round tower; the wolfhound was added as a consequence of the prominence of that animal in the Ossianic stories.

(Comerford 238)

一方で、「ステージ・アイリッシュマン」(“stage Irishman”) の根強い伝統・偏見もあった。「ステージ・アイリッシュマン」とは、17 世紀以来、主にイングランドの演劇により、舞台上で形作られてきた、ステレオタイプそのもののアイルランド人像。純朴でお人好しの農民、訛りが強くおしゃべりな酒好き、自分の間抜けな発言・行動に気づかない愚者・道化、というパターン化されたおきまりの人物造型がそれである。

18 世紀から 19 世紀へと時代が進み、イングランドとアイルランドとの対立が激化するにつれて、アイルランド人は、野蛮で暴力的な危険な怪物として描かれること



图 1 “The Irish Frankenstein”,
Punch, 4 November 1843.

が多くなる。人間よりも獣（特に「猿」）に近く、棍棒などの武器を手にした姿で、しばしば血に飢えた怪物（フランケンシュタイン、吸血鬼など）として表象されるのである。

* * *

19世紀英国におけるアイルランド(人)の表象の一端を、絵入り週刊誌 *Punch* にみてみよう。*Punch* は1841年創刊(翌42年より挿絵入り)。諷刺画(“cartoons”)の面白さで知られ、19世紀後半におけるイングランド中産階級のアイルランド(人)観形成に大きな役割を果たした雑誌である。

例えば、図 1 (“The Irish Frankenstein”) では、当時のアイルランドの指導者だった Daniel O’Connell (1775-1847) が、怪物(獣のような農民)を呼び出すフランケンシュタイン博士として描かれている(*Punch* 1843年11月、J. Kenny Meadows 画)。併合撤廃 (“Repeal”) を目指す運動を指揮し、“monster meetings” と呼ばれる大衆動員の大規模集会(1843年にも)で有名であったから、なおさら「怪物」なのであろうか。怪物の胸にある文字がわざわざアイルランド訛りで “Repale” (“Repeal” でなく) としてある芸の細かさに注意。

Punch 誌の数ある “cartoonists” のなかで、少なくともアイルランド(人)に関する限り、最も特徴的なのがジョン・テニエル (John Tenniel, 1820-1914) であることには疑いの余地がない。その存在感は群を抜いている。テニエルは現在、一般には、Lewis Carroll (1832-98) の2冊のアリス物語 — *Alice’s Adventures in Wonderland* (1865)、*Through the Looking-Glass and What Alice Found There* (1871)— の挿絵で知られている。1850年から *Punch* 誌で描き始め、1864年からは同誌の “chief cartoonist” となって長く活躍した。

彼の描いた画を以下にいくつかまとめて見てみよう。“J”、“T”、“L” の三文字を組み合わせた署名が独特である。

図 2 は、“The Fenian-Pest” (1866年)。猿のようなアイルランド人という、テニエルの画にお馴染みの手法の一枚である。1860年代半ばは、「フィニアン」 (“Fenian”) の独立運動が盛んになった時期で、翌1867年は、いわゆる「フィニアン」蜂起と鎮圧の年となる。力強く勇ましい「ブリタニア」 (“Britannia” = イングランド) とおとなしく無力な「ヒベルニア」 (“Hibernia” = アイルランド) の姉妹がいる。獰猛な「フィニアン」に悩まされるヒベルニア (“...what are we to do with these troublesome people?”) にブリタ



☒ 2 "The Fenian-Pest",
Punch, 3 March 1866.

ニアが忠告する。まず「隔離」(“isolation”)を、「そして次に ——」(“Try isolation first, my dear, and then ---”)、と飲み込んだことばは、もちろん「屠殺」(“slaughter”)である。家畜の伝染病(当時流行した)の比喩が全体を支配している。「凶暴で獣じみた邪悪な少数のアイルランド人」を男性のイメージで提示し、「誠実で慎み深い善良な多数のアイルランド人」を女性のイメージで対比させるという、19世紀の常套手段がここにも見られる。そして、「無力なヒベルニアはブリタニアの庇護を必要とする」、との図式が反復・強調されるのだ。

女性としてのアイルランド(あるいは「エリン」という表象は、イングランド側にとって政治的に都合のいいものでもあった。夢見がちで、美しく、守られるべきかよわい乙女。19世紀後半に、イングランドの批評家 Matthew Arnold (1822-88) が、イングランド(「アングロ・サクソン」)を補完・強化させるべく持ち出すことになるアイルランド(「ケルト」)観においてそのことは顕在化する。彼の文学論 *On the Study of Celtic Literature* (1867) や文化論 *Culture and Anarchy* (1869) が、「感受性豊かだが、自己統治能力を欠くアイルランド人」というステレオタイプを確立させる政治的書物でもあったことは今日よく知られている。

独立・革命の象徴としての女性「エリン」と、支配・服従の心性をたすけもする「ケルト」性。「乙女としてのアイルランド」像は、そうした二重性をもっていると言わなければならない。ちょうど詩人 Thomas Moore (1779-1852) がそうであったように。そして、テニエルらは、後者を巧妙に利用した。

図 3 は、“The Irish ‘Tempest’”(1870年)。同じ図式の変奏がみられる。William Shakespeare (1564-1616) の *The Tempest* (1611) を下敷きにしていて、首相 William Ewart Gladstone (1809-98) が Prospero、その娘 Miranda 役はヒベルニア、怪物 Caliban は、言うまでもなく、猿に似た悪いアイルランド人である。ヒベルニアは Gladstone に抱き締められ、守られている。

図 4 は、“The Irish Devil-Fish”(1881年6月)。猿の頭をした、文字通り悪魔じみたタコ(“Devil-fish”)は、1879年に結成された「アイルランド土地同盟」(“the Irish Land League”)で、首相 Gladstone と「土地戦争」の真最中である(1882年まで)。Victor Hugo (1802-85) からの引用「タコの唯一の弱点は頭である」(“The Devil-fish, in fact, is only vulnerable through the head.”)が意味するのは、運動の「頭」=「指導者」を取り除くべしということ。そのとおりに、まもなく Charles Stewart Parnell (1846-91) をはじめとする指導者たちは逮捕され、運動は非合法化されることになる。



図 3 “The Irish ‘Tempest’”,
Punch, 19 March 1870.



図 4 “The Irish Devil-Fish”,
Punch, 18 June 1881.

図 5 は、“Two Forces”(1881年10月)。無力でか弱い乙女ヒベルニアを、毅然としたブリタニアが保護する。「土地同盟」(“Land League”)を踏みつけ、「法」(“The Law”)と書かれた剣を手にしたブリタニアは、「無政府 / 無秩序」(“Anarchy”)の文字のついた帽子を被って石を投げようとする粗暴なアイルランド人(いつものとおり猿に似た姿の男)を威圧している。アイルランドには自治能力がないため“Anarchy”に陥る危険がある——そこで、ブリタニアがヒベルニアを(アイルランドの)アナーキストから親切にも守ってあげるのだ、という構図である。ブリタニア、ヒベルニア、アナキーというこの(創られた)三角関係は、19世紀から20世紀にかけてのイングランド側の抱くアイルランド(問題)観を典型的に示している。その意味でテニエルの画の中でも特に重要なものと言えよう。

独立運動の盛り上がり按比例して、テニエルの図像も過激度を増してゆく。彼はアイルランド人を単に猿に似せて描くだけにとどまらず、グロテスクな人喰いの怪物に変身させる。

図 6 は、“The Irish Frankenstein”(1882年)。フランケンシュタインのモチーフ(図 1と同じ)をテニエル流に展開したもの。この年ダブリンのフィニックス・パークで起きた暗殺事件をアイルランドの「無冠の帝王」Charles Stewart Parnell に結びつけて弾劾しようとする企む、イングランドのキャンペーンがおこなわれた。その一環である。血の滴る短剣とピストルを持つ猿に似た怪物が画面いっぱい描かれている。画面下の“C. S. P-RN-LL”という小さな文字が“C. S. PARNELL”のことを指し示すのは誰の目にも明らかだ。

なお、Parnell 追い落としの陰謀、裏切り、失脚(1890年)と失意の死(1891年)は、大作家 James Joyce(1882-1941)の作品に色濃く影を落とすことになる。フィニックス・パーク暗殺事件の年に生まれた Joyce は、Parnell の小さな信奉者であった。

図 7 は、“The Irish ‘Vampire’”(1885年)。Parnell は、“Land League”に代わるものとして“the Irish National League”を結成し(1882年10月)、議会活動を通じての「自治」(“Home Rule”)達成を目指していた。図では、無防備な姿で眠るヒベルニア(傍らにハープがある)に、吸血鬼(“Vampire”)が襲いかかろうとしている。吸血鬼は、Parnell の容貌をし、からだに“National League”の文字が見える。(付言すれば、最も有名な吸血鬼物語 *Dracula* は、この後、ダブリン生まれの作家 Bram Stoker [1847-1912] によって書かれることになる [1897年]。)



図 5 “Two Forces”,
Punch, 29 October 1881.

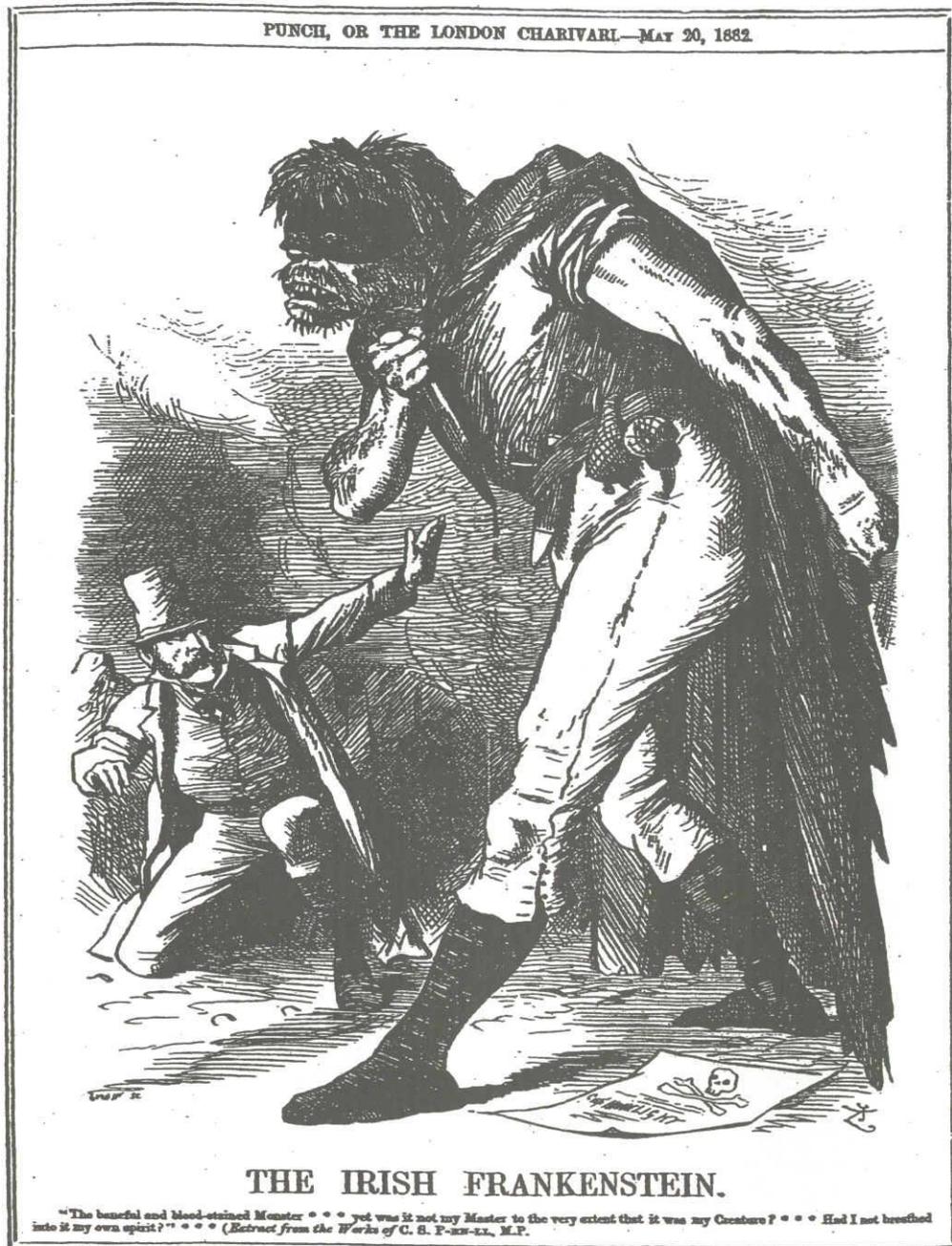


图 6 “The Irish Frankenstein”,
Punch, 20 May 1882.

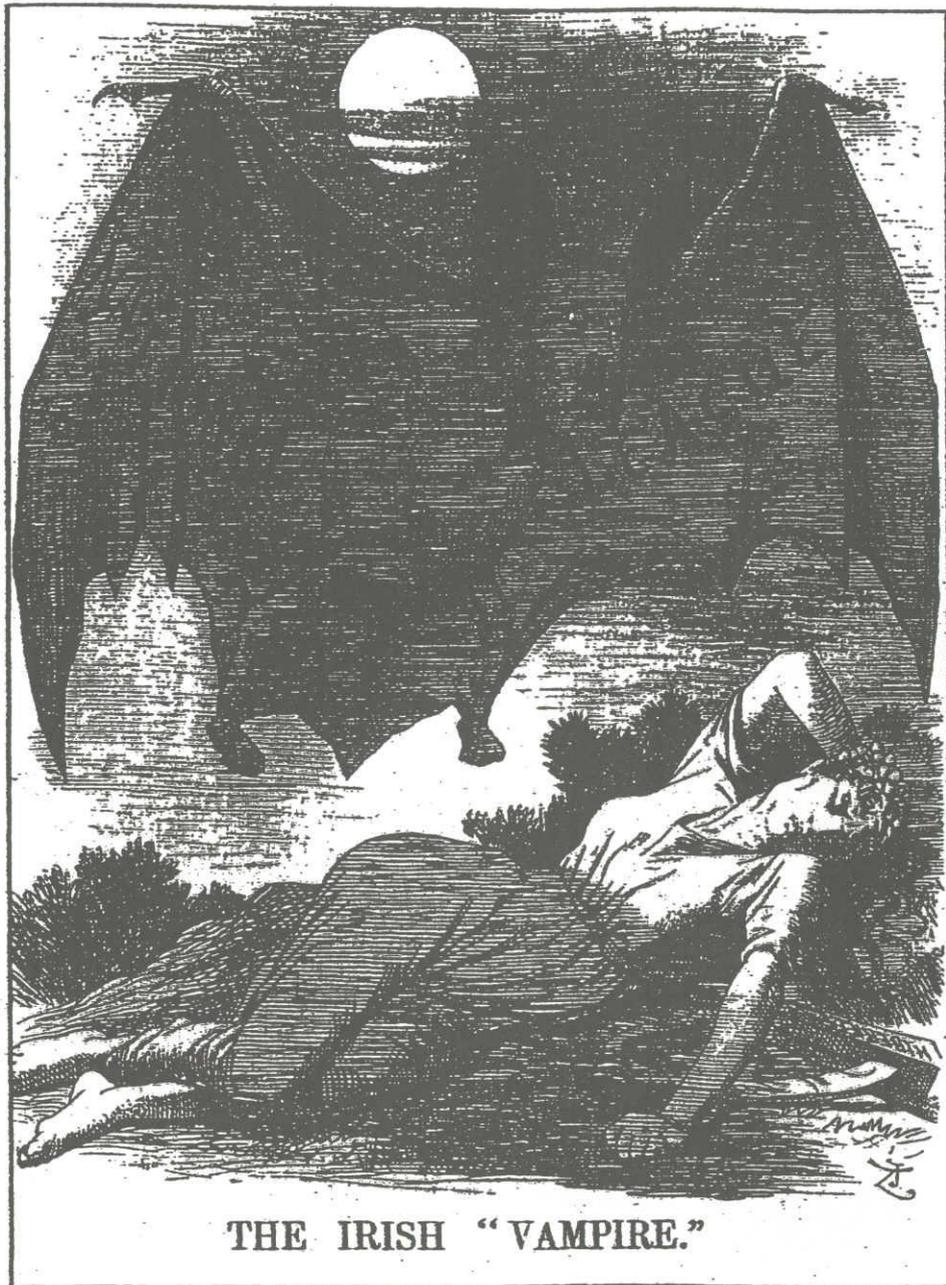


図 7 “The Irish ‘Vampire’”,
Punch, 24 October 1885.

* * *

アイルランドとイングランド、ヒベルニアとブリタニア、ケルトとアングロ・サクソン —— *Punch* 誌がこの種の対立概念を自明とする立場に立ってイングランドの側からアイルランドをどのように表象してきたかを、テニエルを主たる例として、上に見てきた。そこに読み取れるのは、イングランド人のもつアイルランド人への偏見・差別だけではない。二項対立的関係においては、一方（自己）は他方（他者）によって規定・形成される。こうした諷刺画は、イングランド(人)が自分自身をどのようなものとして捉えて(あるいは、捉えたいと思って)いるか(= 自己像) をもまた表しているのである。

19 世紀から明確に *Punch* などの雑誌・新聞により強化されてきたステレオタイプ。イングランドは、アイルランドを(否定的)媒介にして、自らの「ナショナルアイ」を構築していった。それではアイルランドの方はどうなのだろうか。「表象される他者」にとどまらない新たな道はあり得るのか。

その可能性の探求こそが、19 世紀末からのアイルランド文化運動を推進する原動力となることを、今日の私たちは知っている。

* 本稿は、科学研究費補助金（基盤研究(C)）による研究成果の一部である。

参考文献

- Comerford, R. V. *Ireland*. London: Hodder Arnold, 2003.
- Cullingford, Elizabeth Butler. *Ireland's Others: Gender and Ethnicity in Irish Literature and Popular Culture*. Cork: Cork University Press, 2001.
- Curtis, Jr., L. Perry. *Apes and Angels: The Irishman in Victorian Caricature*. Newton Abbot: David & Charles, 1971.
- Douglas, Roy, et al. *Drawing Conclusions: A Cartoon History of Anglo-Irish Relations, 1798-1998*. Belfast: Blackstaff Press, 1998.

Moore, Thomas. *Moore's Irish Melodies: The Illustrated 1846 Edition*. Illust. by Daniel Maclise. Mineola, N. Y.: Dover, 2000.

Welch, Robert. *Irish Poetry from Moore to Yeats*. Gerrards Cross: Colin Smythe, 1980.

Williams, Leslie A. *Daniel O'Connell, the British Press and the Irish Famine: Killing Remarks*. Ed. William H. A. Williams. Aldershot: Ashgate, 2003.